

道営事業等で整備された疎水材暗渠については、10年程度経過しても疎水材や管自体の機能は維持されているが、作土直下の耕盤層の形成等による排水性能の低下が課題となっている。関係団体及び生産者を対象に今後の排水対策の参考にして頂くことを目的として、鹿追町および音更町において試掘した暗渠断面を囲みながら意見交換を行う排水対策現地研修会を開催した。(10月22日～23日)

研修会に先立ち「暗渠排水対策検討調査」(道立総合研究機構中央農業試験場・道農政部農村振興局)として暗渠断面を試掘確認するとともに、土壌の透排水性についての診断調査を行った。調査は調整課、整備課、南部耕地出張所、北部耕地出張所合同の農業土木技術職員研修を兼ねて行われ、暗渠整備後の機能低下要因について担当職員が体感する絶好の機会となった。



その後、生産者、JA、町、農業改良普及センター、十勝農業試験場、土地改良事業団体連合会などが加わり、数十名の参加者で研修会を開催した。始めに振興局から「小麦の安定多収の決め手は排水対策」と題して、パネルにより排水機能低下要因や、耕盤層と小麦の根張りについて、管内の調査事例をもとに説明を行った。引き続き暗渠断面を囲んで、中央農業試験場竹内研究主幹より、経年変化しても疎水材や管自体に劣化は見られないこと、表土の練り返しや耕盤層の生成が排水機能低下の主な要因であること、耕盤層対策の重要性等について解説が行われた。



参加者からは、土壌物理性や暗渠疎水材の透水性に加えて、「暗渠へ効果的に水を導くためどのような機械作業を実施すべきか」といった営農対策についての意見が多く交わされ、後日、参加者の要望に応じて別のほ場で調査・意見交換を行うなど、有意義な研修会となった。

疎水材暗渠の整備が進められるなか営農上の排水対策は益々重要となっており、農地施設保全整備情報を有効に活用し、今後とも広く取組みを継続することが重要と感じられた。